トップの直径と形状について

トップの素材に関する考察の４回目、トップの直径と形状について解説していく。具体的には、１．トップの直径の違いについて、２．ストレートトップとテーパートップについて、２つの事項について、解説していく。

1. **トップの直径の違いについて**
2. **ストレートトップとテーパートップについて**
3. **ストレートトップとテーパートップの具体的シーンでの使い分けについて**

１．トップの直径の違いについて
トップの径が違うと、どのような違いがでてくるのか、具体的には以下の３点になる。
１）体積が変わる
２）体積が変わることによるエサを抱える量が変わる →径が太いほど、エサを抱えることができる。
３）パイプトップでは戻る力が変わる　→パイプトップでは、直径が太いほどエサをほどく力が強い。また、パイプトップでの底釣りではウキが戻る力が強い。

トップの直径が異なると、どれ位体積が異なるか、数字で示してみる。
わかりやすくするために、ストレートトップでの比較とした。
また、浅ダナウドンセットでは、クワセエサを付けて３目盛り出しという設定が多いので、長さ 40mm で比較してみる。
円柱の体積の計算式 $V=\pi r2h$ （V ：体積、r ：底面の半径、h ：高さ、π ：円周率（約 3.14159））

0.6ｍｍ径で 40mm =約 11.31
0.8ｍｍ径で 40mm =約 20.11
1.0ｍｍ径で 40mm =約 31.42
1.2ｍｍ径で 40mm =約 45.21
1.4ｍｍ径で 40mm =約 61.54

浅ダナウドン抜きセットでよく使われる直径 0.6mm と浅ダナウドンセットのバラケ持たせでよく使われる直径 1.2mm では、約４倍もエサを抱える量が違うということになる。
盛期ではバラケエサを持たせる釣りになるためトップは太め、厳寒期ではバラケエサを持たせる必要がなく、かつアタリも小さくなることから、トップは細めになる。

２．ストレートトップとテーパートップについて

ストレートトップとは、元径と先端径が同じものであり、テーパートップとは、元径と先端径が異なるものである。
通常は、元径が先端径より太く、先端径が細くなっているものが主流であるが、過去には逆テーパートップというものも存在したが、最近ではみかけなくなってしまった。

画像 1:右側がストレートパイプトップ、左側がテーパー付きパイプトップ、共に元径 1.4mm

PC パイプトップは、市販されているものを使用せざるを得ない。
グラスムクトップは、加工がしやすいため自分でテーパー状に削ることができる。最近では、テーパー加工されたものも販売されている。
PC ムクトップは、加工は可能であるが、柔らかいため、加工には手間がかかってしまう。このため、テーパー加工された PC ムクトップが販売されている。

３．ストレートトップとテーパートップの具体的シーンでの使い分け
（１）浅ダナ両ダンゴ
盛期の浅ダナ両ダンゴでは、バラケエサを持たせながらできるだけトップを深くなじませ、タナを作る釣りになる。テーパートップは、先端が細くなるため、よりエサをタナに入れやすくなる。
（２）浅ダナウドンセット釣り
浅ダナウドンセット釣りでは、バラケをどれくらいタナに入れるのかが重要になる。特にトップ３目盛り出しという設定が多いことから、バラケの持たせ具合は、トップの体積で決定

されることが多い。しっかりしたバラケエサをタナに十分入れたい場合には、ストレートトップが適している。

浅ダナウドンセット釣りでは、へら鮒の活性が高くなる程、バラケをタナに入れる量は多くなり、逆に厳寒期では、バラケを入れ過ぎると遠まきになることから、あまりバラケを入れないようにする。
ウキのトップは、バラケの投入量を示す基準であり、トップの目盛りだけでなく、トップの直径やテーパーのあるなしについても、気を配る必要がある。
バラケの持たせ具合、バラケ抜け具合は、ウキを通した想像の世界であり、見えない水中の状態を数値で示している指標の一つがウキの目盛りである。
トップのなじみ幅の多い、少ない、が判断の基準のひとつとなる。
トップの目盛りを直径や形状毎に細分化して数値化し、わかりやすく整理することによって、より釣りが楽になると考えている。
言い換えれば、自分のエサ付けの対応幅を超えそうな時、エサ落ち目盛りを変更するだけではなく、違う直径のトップがついたウキへの交換を行うと、より釣りが楽になる。

次回は、トップの塗りについて、複数回に分けて解説していきたい。